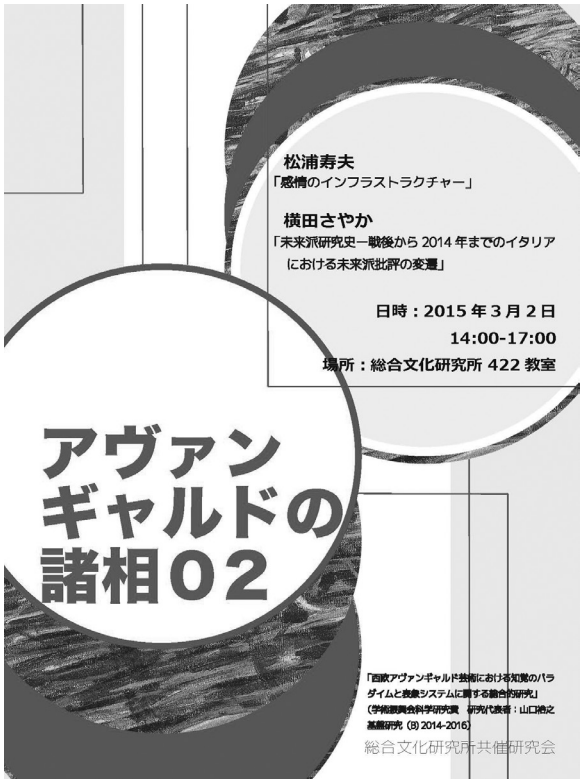
「アヴァンギャルドの諸相02・03」（二〇一五年三月二日、一一月二六日、総合文化研究所）

報告　山口裕之

総合文化研究所共催による公開研究会「アヴァンギャルドの諸相」は、総合文化研究所の何人かの所員によって構成される科研費のプロジェクト「西欧アヴァンギャルド芸術における知覚のパラダイムと表象システムに関する総合的研究」の枠内で企画されている一連のワークショップである。第一回（二〇一四年九月二九日、前田和泉「逆遠近法と複数のリアリズム〜ロシア・アヴァンギャルドの成立と展開〜」、西岡あかね「ドイツにおけるアヴァンギャルド概念史」）に引き続き、二〇一五年には第二回、第三回の研究会が開かれた。

三月二日に総合文化研究所で開催された「アヴァンギャルドの諸相02」では、松浦寿夫氏による「感情のインフラストラクチャー」、および横田さやか氏の「未来派研究史――戦後から二〇一四年までのイタリアにおける未来派批評の変遷」の二つの報告が行われた。松浦史の発表では、「インフラストラクチャー」という言葉によって、感情を流通させる通路としてのいわば「小さなインフラ」が意図されている。そのような流通形態、表記可能な場を前提とすることによって、「我と他」が感情において一つになる場としての「感情移入(empathy)」とモダニティの問題が（とりわけ日本の文学・美術史のコンテクストのなかで）論じられていった。一方、横田氏はこれまでおもに未来派の航空舞踏に焦点を当てた研究を進めてきたが、ここでは第二次世界大戦後から現代に至る未来派受容のいくつかの局面を整理しつつ概観してゆくことで、未来派そのものとともに、二〇世紀後半以降のアヴァンギャルド受容の展開をたどる作業ともなった。

第三回目となるワークショップ「アヴァンギャルドの諸相03」では、和田忠彦氏の「鉄道、映画、そして郊外――ピランデッロにみる近代化と感覚変容」、また吉本秀之氏による「カメラ・オブスクラの歴史」という二つの発表があった。和田氏の発表では、感覚変容の装置としての列車を直接的な対象としている。列車は、イタリア近代化の過程、都市と郊外という感覚の形成においてきわめて重要な役割を果たすとともに、とりわけ未来派の表現と知覚にとって決定的な意味をもっている。例えば、アントン・ジュリア・ブラガリアの「フォト・ディナミズモ」のように、点としての〈現在〉の平面のうえに〈過去〉の時間と運動の軌跡を定着させようとする試みにおいては、知覚の限界を超えるものに対するある種の危機感が表現となって表れているのかもしれない。こういった技術と知覚の関係をめぐる問題は、吉本氏によるカメラ・オブスクラをめぐるテーマでも引き続き取り上げられることになった。吉本氏は、百科

事典的な記述におけるカメラ・オブスクラの様態をたどることにより、カメラ・オブスクラの多様な目的と機能の志向を丹念に確認していった。

すでに述べたように、これらの企画は科研プロジェクトのなかでのワークショップではあるが、公開の研究会としているため、学生、教員や一般の参加者も加わったかたちで発表と質疑応答が行われた。これに続く企画としては、二〇一六月二月に国内研究者によるシンポジウムが予定されている。